

北欧保育短信(二)

飯田 泰造

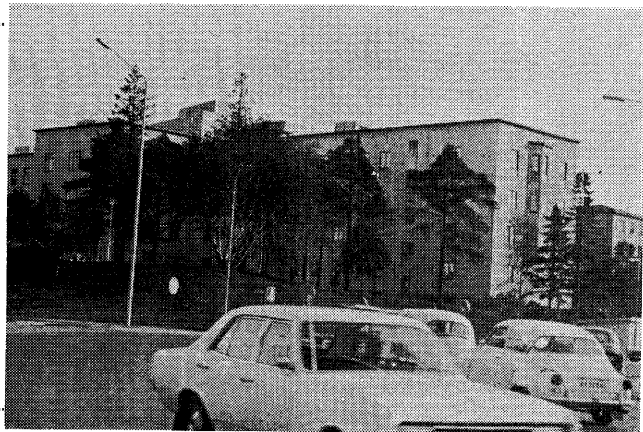
(一)

社会保障の完備したスウェーデンの各都市には、ラサレテット(Lasarettet)と呼ぶ公共病院がある。ウメオー(Umeå)にも、地方の都市にこんな大きな驚くほど立派ながある。このラサレテットに、かねてから聞いていた特殊な幼稚園を開設しておられるイボンニー・リンクウイスト女史(Eronny Lindqvist)を訪ねることができた。ウメオー大学と密接な関係を持った

この病院の一角が小児専門の病院とクリニックになっていて、かなり広い部分を占めている。

約束の時間に女史は玄関まで出迎えて、まず広い病院の中を案内して下さった。どの病室でも、女史の来られるのを待ちあぐねていたかのように、子どもたちが挨拶をする。女史は、一人一人にやさしく声をかけたり、愛撫をし、また私を子どもたちに紹介して下さった。もうその頃から、ただの小児科の病院とは違ったふんい気であることを

ウメオーにある
ラサレテット公共病院



感じていたが、それはどの部屋にも子どもたちの描いた創造的な美しい色の絵がかけてあり、また自由な造形や、おもしろいモビールが部屋を浮き立たせていたから。そして廊下のいたる所に立派な額に入れられた絵——あるものはフィンガーペインティングであり、またデカルコマニーやカラーシユで満たされていた。そしてとかく、暗く、沈みがちな病室という感じを全く受けないのであった。ちょうど行き違った移動図書室には、子どもの本がぎっしりつまっており、二人の図書係がついていた。各科毎の待合室も、小さいながら見事な色彩と楽しくなる遊具で満たされているのを見た。

かなりの道程を歩いてたどりついた（全くその感じだった）所がこのウメオー・ラサレットの幼稚園（ここでは Burntga rdenつまりキンダーガーデンという呼び方をしておられた）である。決して広くないこ

の一区画は、二十坪ほどの大部屋とその半分ほどの小部屋、それに準備室と女史の研究室という小じんまりしたものであった。ちょうど十五人の子どもたちが保育を受けていたが、皆ハンディキャップを持った子どもたちであるから、年齢は別に問わないが三歳から十四歳ぐらいまでいるのと。手足の不自由な子ども、耳や口の機能を失っている子ども、車椅子にのったままの子ども、あるいは全くベッドに横になったままの子どももいるのだが、病室に放置されたままになっていた子どもたちをこうして「幼稚園」に運び、他の何不自由のない子どもと同様に日の目を見せてやろうというわけである。

二人の先生と二人の助手が共に保育にたずさわっているが、ここまでにするには多大な努力と苦心があったことを伺った。保育室の中の遊具や教具に目をとめてみると、なるほどとうなずかされる多くのもの



ウメオー・ラサレットの幼稚園
車椅子にのった子ども、全くベ
ッドに横たわったままの子どもなど
が保育をうけている。

があった。それはいずれも一人一人の子どものかゆいところに手の届くような配慮がしてあり、その着想のよさと実行力に感心させられた。手足の不自由な子どものために高さを自由に調節できる椅子、自由に動かせせる車つきの砂箱や道具入れ、美しく彩色された椅子の一つ一つは先生たちが自分で塗ったとのことであった。小さなものでは、握力の不足な子どものためにクレヨン握りよい形に成形してあり、全く愛情のこまやかなものであった。

冬の寒くまた長いこの地方では、外遊びは比較的少ないが、それでもあまり広くない庭の遊具にもあちこちにアイデアを見出すことができた。足の不自由な子どものためには、ブランコの踏板が幅広い丈夫な皮でこしらえてあり、角度を自由に変えられる滑り台、よじ登りやすいように屋根を低くしてある小屋、そして砂場は、三段になつていてしゃがまないで砂遊びのできるく

ふうもしてあった。ここにも同じようにカウボーイごっこができるようにと、滑りおけるななめの滑り棒も用意してあった。

午前中に十五人、午後別に十五人が保育を受けていて、後半の子どもの中には、ベッドのままの重症の黒人の子ともいたが、全く差別をしないで、同じように親切に扱われていた。また、フィンガーペインティングは、大へん子どもたちに人気があり、実に楽しそうにぬりたくっているのを見た時、ああここが病室の多くの絵のできる所であるなど知った。

手足の不自由な四歳ぐらいの男の子が木工台に向かって、しきりに大きな鋸で板を挽いていたが、漸くこれまでにあったのだそうだが、とても嬉しそうに、いつまでも板にとり組んでいた。別棟には精神治療を要する子どものクリニックがあり、ここでも若い女の先生が忍耐を要する仕事に当たっているのを見た。また、美しい配色と各

種のくふうをこらした教具や遊具を見ることができた。

病院の中に幼稚園を開設するという困難ながら大切な仕事をあえて実行して来られた女史の仕事は、いろいろな支障をのり越えて、今では多くの支持者を得ており、また、病院(医師)との協力により医学的にもよい効果を挙げているとのことである。

女史は講議に出かける途次、広い大学構内を案内して下さったが、その足どりの自信にみちているいかにも行動する人という印象を強く受けた。そして、現在もなお、良いと思ったことは何でもやるのです。この仕事は幼稚園の先生としてなすべき一つの大切なことではないでしょうかと強くい、自著を贈って下さった。

(二)

母親が外に出て働くことの多いスウェーデンでは、保育園(daghem)の存在が切実

です。私はストックホルムに滞在中、いくつかの保育園を見せてもらいました。それは幼稚園と教育内容は全く異ならないといいますが、朝六時半から始まり、皆が揃うのは八時頃で、夕方七時頃まで残っている子どももいるそうです。年齢は生後六カ月から学齢前までですが、幼稚園が一日に三時間だけなのに反して、ここではゆっくり保育が受けられるわけです。

街の中心地に近いクロノベル保育園は特に創造性を重んじる保育をやっていると聞いて訪ねました。なるほど、園全体の建物、庭の遊具、その他の環境があまり広くない市街地の賑やかな場所にあるとは思えない自由な構成をもっていました。十分な素材と、それを生み出していく機会を与えて、思い思いの表現をさせようとの深い配慮があちこちに見られました。とても寒い日でしたが、一步部屋の中に入ると、ボカボカと暖かいので、三、四歳児は、半分裸にな

って思いきったフィンガーペイントに興じていました。隣がシャワーの部屋になっていて、温いお湯がどんどん出るので、安心して体中がえのぐでよごれても、平気でやらせることができるという徹底ぶりです。

五、六歳児も、紙、布、そして毛皮を使って、思いきったコーラシユ（貼り絵）をやっていました。先生といっしょに近所の魚屋へ出かけて行った子どもたちが、鰻（あじ）をたくさん買って来て、ビニールの前掛けをし、ナイフでその魚を開き始めました。中には、気持悪がって、ただ見ている子どももいましたが、やがて全員が、この活動に加わったようです。切り開いたり、骨をぬいたりしながら、触覚を味わわせていたわけです。

スウェーデンの保育園や幼稚園では、どこでも見られる、電気コンロの上には、フライパンがのせられ、バターを落として鰻のフライを作るのも子どもたちの遊びでし

た。そして、これがきょうのお昼の給食のおかずというわけです。自分の手で作ったごちそうを、おいしそうに食べおわった子どもから、後でどろ絵具やクレパスで愉快な魚の絵がいくつかものされていました。

午後、年齢によって一～二時間の昼寝をし、遊んでから、四時半頃一応帰宅（迎えに来る）するのです。絵にしろ、製作にしろ、また、他の活動も一斉にきめてやっているわけなのですが、皆、いつの間にかそれを皆で楽しんでやっているのでした。他の多くの保育園は、ストックホルムでは、アパートの三、四階を借りているとか、地下室を改造したというようなところがかなりあったことは意外でした。そのようにしてもできるだけ多くの施設をしようとしているわけですが、建物は古く、かつあまり適格でなくても、一步室内に入ると、実に豊富な設備や材料を持っているのには感心させられます。保育者養成学校

(Forkeseminavici) からは第二二次の実習生が派遣され、ここでは保育をまかされて、自信をもってやっているのを見ました。もちろん先生の指導の下にですが、きびきびとやっていました。

ここの養成学校の造形の授業や、実習を見ましたが、徹底した民主的なやり方です。生徒たちはあらゆる材料、道具の揃った倉庫のような材料置場から、自由に素材を選んで来て、思い思いの制作をしています。そして気に入るまで時間をかけてやっていました。それでも生徒の中からは、この実際（プラクティス）の時間が少ない、少なくとも週二回（二倍）にしてほしいという要求が、その朝の全校ディスカッションの時出されていました。

そして、羨ましく思ったことは、ここで受けた、理想的な保育の精神や、理論やその方法が、それぞれの実習園や、卒業後の職場としての園でよく生かされ、実践され

ていることでした。日本ではしばしば折角学校で受けた教育が実践されずに、苦勞したり、また途中で挫折してしまう、若い姉妹のあることを聞いているだけに考えさせられました。

郊外にあるスンビベルイの Leksölor（幼稚園と保育園そしてfridshemと呼ぶ児童の校外補導施設の総称）では、満一歳児から、学齢までの子どもたちの描いた絵の成長と発達を、実に細かく収集してある。ミセス・ルンドの長年の労作を見せてもらいましたが、このようにいろいろな角度から幼児教育に打ちこんでおられる先生が多いことはすばらしいことです。特に後で訪ねたホークベルイの幼稚園では、ここは数少ない私立の幼稚園ですが、公立のように、十分な支えのない、かなり貧しく見える施設で、アパートの地下室を改造して作られたこの園を探すのに骨が折れたほどでしたが、部屋の中に入ると、壁に無造作に

貼られてある子どもたちの一ぱいの絵にまづ目を見はりました。その逞ましい創造的なこと……。

そこにはイーゼル（画架）も一台しかありません。しかし、子どもたちは、ときどき思い出したようにその前に立って何気なく腕をふるうのです。その姿は、実にたくまず、見ていて、どうしてこんなに良い絵が描けるのかな、と不思議なほど思い思いに、それぞれ違った絵を描いていました。そして一枚一枚先生のところへ持っていくと、感にたえかねたように心からその絵をほめて語られるのでした。

他の子どもたちは、部屋のそこかしこに満ちている素材で、いろいろな形を作っている者もあり、また別の部屋で（ドラマの部屋と呼んでいましたが）日本流にいえば、ゴッゴ遊びをしていました。驚いたことに、私がその部屋に入って行くと、「ドーゾ」といって、日本のお茶を子ども

が出してくれたことです。わざとらしきも、つけやいばでもなく、きょう訪ねてくる日本人のために、ゴッコの中にそれを取り込んで、何気なくやっていたのです。全く胸のつまりる思いでした。

子どもたちと先生が一つになって、保育を創造していると感じられました。子どもたちが、皆帰ってしまってから先生のミス・ブルナンデルからいろいろお話をうかがいましたが、あらゆる知恵を働かせて、資料や素材を用意されるのです。そのおびたらしい労作を、部屋一ぱいに整理、整頓された中に見ました。そして、きょう子どもたちが何気なく使って遊んでいた教具や遊具のいずれもが、先生手ずからなるものばかりであったことを知り、また私が来る機会に、苦心して「日本」の資料を集められたことも解って、なるほど感心しました。子どもたちが、あのようになくまずに、良い絵をものになっている原因の一つは

ここにあるのだと思わせられました。

この園は保育に長い一生を打ち込んでおられるブルナンデル先生と、若い助手の二人きりですが、ピッタリした一つのふんい気をもっているように感ぜられました。

そして先生はこうつけ加えられました。「何をかけとか、作りなさいとか決していません。それは子どもがきめることです。しかし、道具の使い方や、後片づけはよく教えます。そして私はどんな作品にも必ずよいところがあると信じています」

子どもたちの描いたいくつかの絵をいただいて帰る私の心まで、何か豊かにされる思いであった。ストックホルムにも絵画塾のようなものがやはりあるそうです。「そこで二年ぐらい絵を教わった子どもの絵と比較してあそこの幼稚園の子どもの絵は、決してヒケをとりませんよ」と、私は後で、ある専門家からのことばを聞いたのだった。(1966・11・ストックホルムにて)

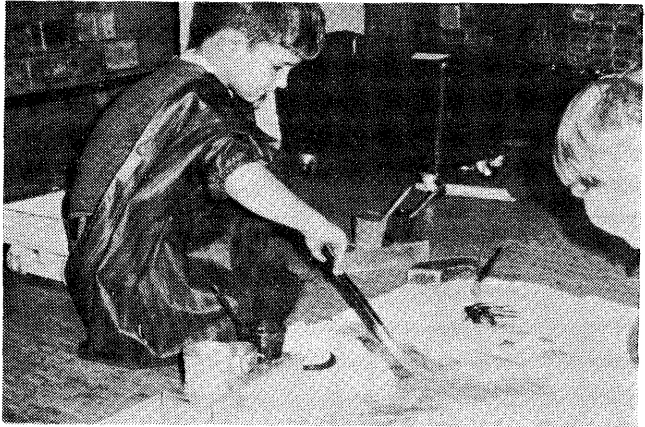


ストックホルム

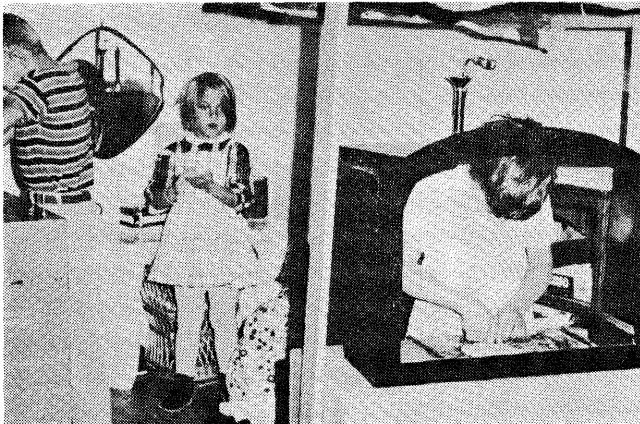
保育学校の図画工作の時間



ストックホルム
保育学校の図画工作の時間



ストックホルムの
ダークヘム（保育園）で



ストックホルムの
ダークヘム（保育園）で